

野田市の伊勢信仰

—奉納絵馬・記念碑を中心として—

石田年子

はじめに

天皇家の先祖神を祀る伊勢神宮への信仰は、伊勢御師達の積極的な活動により、時代が下がるにしたがい武士層から農民を中心とする庶民層へと広がり、寺社詣の盛んとなった江戸後期には「お伊勢参り」が何度もブームを起こしている。

野田地方の村々における伊勢信仰との関りは古く、十二世紀には伊勢神宮の荘園である相馬御厨の古文書中に「目吹」「木野崎」の地名が現れ、永正十五年（一五一八）の伊勢御師・久保倉藤三が記した関東廻村記録・『道者日記』の記述にも、下総国関宿、親野井、目吹、中里、五木などの村名がみられる。又、安永六年（一七七七）に著された『私祈禱檀家帳』による房総三国の伊勢神宮の檀家数は、上総国二万二百十三軒・安房国二万一千二百三十九軒に対して下総国は八万五千四百二十九軒と非常に多い。これは関東地方においても武蔵国、常陸国に次ぐ檀家数で、中世に相馬御厨と称された伊勢神宮の荘園があったこととの関りも推測され、野田市を含む下総国は伊勢神宮への篤い信仰圏であったことが理解できる。

古くから伊勢信仰の続いてきた地域ではあるが、筆者が確認し得た伊勢系の石造物・奉納額・文書は十七世紀以降、特に江戸後期から近代に集中しており、報告はこの時代に限られてしまいが、これらの遺物が語る当地方の伊勢信仰は、舟運で栄えた江戸近郊の農民層の経済的な豊かさを示す査証のひとつと考えられる。

一 伊勢講の石造物

全国の神社を統括する神社本庁の発表では、伊勢信仰系の神社は全国で五千社を越すとされているが、野田市では大小合わせ十二社と少なく、神明宮の石塔造立も十基ほどであることから、当初は当地における伊勢信仰は盛んではなかったのだろうと推察していた。

しかし、各神社の境内に記念碑として「伊勢参宮記念碑」が多造されている事に気付き、市内全域の伊勢講碑（以下伊勢参宮に関する石造物をこのように称する）を採録してみると、燈籠・狛犬など伊勢より帰郷後に鎮守社に奉納した石造物なども入れると、総数が百六十基ほどあり、後述する神社の拝殿に掲

げられた伊勢講による絵馬・額をプラスすると、四百例もの伊勢講の遺物が確認された。これにより、当市での伊勢信仰の広がりを認識させられることとなった。

伊勢信仰を庶民に広げた伊勢御師達はその企業戦略のひとつとして、地元にはあまり礼拝の対象物を勧請させず、直接伊勢神宮に参拝し、御師宅に設えた神殿で御神樂奉納の功德を説いてまわった。そのため数年毎に伊勢本宮に代参を立て、太々神樂を奉納することに熱心であった村人達にとって、依り代としての石塔造立などは念頭に無かったようである。

1. 市内の石造神明宮

野田市内で確認している神明宮の最古の石祠は、船形地区松山の田中の塚上に祀られた神明神社の御神体の石祠である。この塔には「宝永三丙戌年十一月吉日」の造立年と「船形村惣氏子」との刻字はあるが、神明宮とは彫られておらず伝承に頼るしかない。この社で問題なのは、明治期に浅間神社と合祀したため、神明宮の石祠の中に浅間神社の木花咲耶姫像が納められていることである。これでは、浅間信仰が宝永期からあったと誤解されてしまうし、神明神社の御神体が解からなくなってしまう心配がある。

大神宮と明記された石塔は、現在の谷津自治会館敷地内に祀られている神明社の御神体で、宝暦十年（一七六〇）に谷津村惣氏子によって造立された大振りの石祠である。この二基を入れて江戸期の神明塔が八基、明治期が二基で、いずれにしても野田市内に造立されている三千基にも及ぶ石塔の割合からすると無いに等しい数である。

2. 伊勢講碑

地元信仰対象とする神社や石塔が少ない事とは逆に、伊勢神宮への参拝の記念碑である伊勢講碑は百二十四基と非常に多い。

これらの石碑は正面に「天照皇太神宮」や「伊勢太々神樂奉奏記念」「伊勢参拝記念」などと大書され、裏面に講頭・世話人・参詣者の氏名、参拝した年号、寄附連名などが彫られているもので、その多くは根府川石と呼ばれる東北産の石材を加工したものが使われている。



図1は確認した伊勢講碑と奉納額から、村々の参宮数を年代別にグラフに現わしたものである。江戸期の伊勢神宮へは、農耕神として五穀豊穰や天候温順の祈願を主としたが、明治に入ると天皇家との繋がりから国家神道の頂点と位置づけられたことにより、一地方の伊勢講と言えども、その動きが明治以後の日本の歴史と連動していることに気付かされる。

参宮を行う村々は日清・日露戦争頃から増え始め、大正期から太平洋戦争に向かって急激な伸びとなっている。敗戦で一時落ち込んだ参宮だが、戦後は国の復興や農業政策による農村の景気の上昇にともなって回復している。最近では米価の下落などによる農業の下降と村組織の弱体化で伊勢講は消滅の危機を

迎えているかに思える。

3. 伊勢講による神社周辺の石造物

先の伊勢講碑の碑文から、伊勢参詣者達は帰郷後に鎮守神社に記念碑の造立や奉納額をあげるだけでなく、種々の石造物を奉納していることがわかる。

表1は神社・境内で確認された伊勢講関連の奉納物の詳細一覧である。その多くが鎮守神社を荘厳する鳥居・燈籠・玉垣・石段等々の石造物であり、現在ある神社の装丁の殆どが伊勢講の寄附によって整えられたと云っても過言ではない。

表1. 伊勢講奉納品

| | 奉納品 | 数量 |
|----|---------|-----|
| 1 | 絵馬・文字額 | 196 |
| 2 | 記念碑 | 124 |
| 3 | 敷石 | 28 |
| 4 | 寄付金 | 18 |
| 5 | 燈籠 | 16 |
| 6 | 石段 | 6 |
| 7 | 狛犬 | 6 |
| 8 | 鳥居 | 5 |
| 9 | 手洗石 | 4 |
| 10 | 玉垣・石垣 | 4 |
| 11 | 幟立 | 3 |
| 12 | 句碑 | 3 |
| 13 | 記念樹 | 3 |
| 14 | 井戸側再建寄附 | 1 |
| 15 | 畳貳拾畳 | 1 |
| 16 | 唐獅子一對 | 1 |
| 17 | 奉納幟小屋 | 1 |
| 18 | 大杉堂改築 | 1 |
| | 合計 | 421 |

特に目立つのは敷石の設置で、神社への参道が関東ローム層による赤土のため、雨が降るとぬかるみになってしまいうことによる難儀から、氏子達に切望されたのかも知れない。

江戸期は太々神楽の奉奏に大金が掛かったが、明治の宗教改革によって御師制度が廃止となり、太々神楽奉納の支払いなどが軽減された為、この様な形で地元で還元できるようになった可能性が考えられる。神社周辺への奉納石造物がもつとも盛ん

であったのは、軍事色の強くなる大正末から第二次世界大戦の頃である。

又、野田市上町の愛宕神社境内には文政十二年（一八二九）に造立された巨大な石燈籠がある。その基礎部分には造立に際しての世話人や寄附連名が刻まれており、興味深いのは、その中に伊勢の御師である龍太夫と澤潟太夫が名を連ねていることである。下総一帯は外宮の御師である龍太夫の檀那場であったとされるが、野田市の旅日記などには五十嵐川沿いの宇治に邸宅のあった澤潟太夫家でも太々神楽を奉奏した記述が出てくる。

図1 記念碑・奉納額から見た参宮数の推移

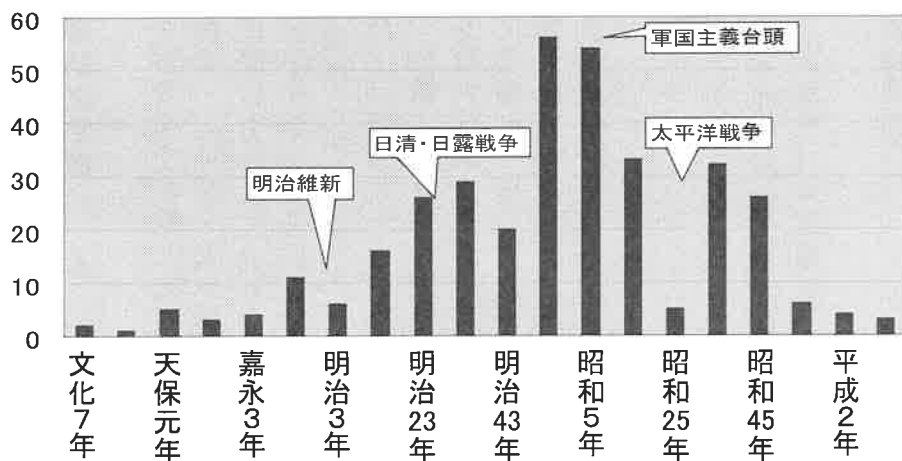


表2. 奉納額の種類と数

| No. | 銘 | 種類 | 枚数 |
|-----|--------------|-----|-----|
| 1 | 伊勢太々御神楽奉納額 | 書額 | 74 |
| 2 | 伊勢太々御神楽図 | 絵馬 | 33 |
| 3 | 伊勢神宮参拝記念額 | 書額 | 43 |
| 4 | 二見ヶ浦図 | 絵馬 | 12 |
| 5 | 天の岩戸図 | 絵馬 | 12 |
| 6 | 伊勢神宮と他の神社参詣額 | 書額 | 9 |
| 7 | 武者絵図 | 絵馬 | 7 |
| 8 | 神功皇后と武之内宿彌図 | 絵馬 | 6 |
| 9 | 伊勢参拝記念 | 写真 | 6 |
| 10 | 伊勢神宮図 | 絵馬 | 5 |
| 11 | 伊勢大廟参拝記念 | 印刷物 | 3 |
| 12 | 一万度御抜大麻 | 大麻箱 | 3 |
| | | 計 | 213 |

二 伊勢講の奉納絵馬・額

市内の社寺に奉納されていた江戸期から現在までの奉納絵馬と額は総数で千六百枚を数え、そのうち伊勢信仰に関するものは二百十三枚と全体の十三%ほどであった。それらの大半が伊勢神宮への参詣記念、いわゆる伊勢講のもので、拝殿の中央に飾られる大額が目立ち、当時の村人達の伊勢神宮に対する信仰の篤さを感じる。

野田市内で初出の伊勢太々御神楽の奉納額は、木間ヶ瀬地区・白山神社の拝殿正面に飾られている一万度御祓大麻の木額である。この周辺ではあまり類例のない手の込んだ造りのもので、享和元年（一八〇一）正月に惣講中で奉納している。この後、ボツボツと伊勢講による絵馬の奉納が始まる。どのような形式のものが奉納されていたかについて表2に示した。以下はその説明である。

1. 伊勢太々神楽奉納文字額

伊勢に参り、太々御神楽を奉納したことを記念する文字額である。伊勢神楽は神楽・太神楽・太々神楽と、願主の出す費用によりランクが三段階に分かれており、太々神楽の奉納は最低でも十五両程の料金がかかったという。

市内の木間ヶ瀬地区に残る文政十一年（一八二八）に上げた太々神楽の記録には、一軒当り一両で総計五十四両という値段が記載されており、拝殿に掲げられている太々御神楽奉納の文字額は、それにより村の経済力を誇示する意味合いもあったと思われる。江戸期の文字額は、櫂の一枚板に有名な書家に依頼して書かれた「伊勢太々神楽奉行」などが金文字で大書され、講員全員の姓名が刻まれた豪華なものが多い。

2. 伊勢太々神楽図

市内に残る伊勢太々神楽図は三十三枚で、そのうち江戸後期が六枚、明治期が二十四枚、大正期が三枚である。

① 江戸期の太々御神楽図

江戸時代の伊勢神楽は湯立てと神楽が結びついた形態が特徴で、御師の邸内に設けられた神楽殿に皇太神を勧請するという形で行われていた。神殿中央に設えた湯釜で湯立てを行い、巫女が両手に笹束を持って神楽舞いを歌舞しながら、釜に浸した笹の湯を諸方に振りかけて禊を行うというものである。絵馬にもこの場面が描かれ、神殿前に湯釜と巫女、居並ぶ神楽役人達、下方には願主達が袴姿で威儀を正して座す、という図柄のものが多い。

② 明治以後の太々御神楽図

御師制度が明治四年(一八七六)に廃止となり、太々神楽の奉納は皇太神宮祈禱所で行われるようになったことから、奉納料金も安くなったと推測され、奉納の意味が江戸期と明治期では大きく変わったものと思われる。

絵馬の図柄も巫女が櫛を持つて踊る形に変化し、断髪に羽織姿の願主達が談笑しながら御神楽を見るというリラックスしたものに变化している。

尚、この頃から伊勢太々神楽の記念として、絵馬の奉納より根府川石を使った記念碑を境内に建てる形が増え始める。

3. 伊勢神宮参拝記念額

太々御神楽奉納が重要な目的であった伊勢参りは、終戦後になるとレジャー感覚で参拝する方向に変化し、団体旅行で他の観光地もまわったことが記されたものが目立ち、奉納額の題字から太々神楽奉納が消える傾向がみられる。

江戸時代から、伊勢参りの折に四国霊場や西国観音霊場など多くの社寺を参詣してまわるのは普通であったが、目的は代参で伊勢太々神楽を奉納することにあつたので、旅日記には記載しても奉納額に書き込むことはなかつた。

4. 二見ヶ浦図

伊勢参りの際に、必ず立ち寄る夫婦岩は有名な名勝である。旅日記などによると二見ヶ浦へは、伊勢に到着すると御師が差し向けた案内人がついてこの海岸を観光しており、茶屋で酒肴の接待などがあり、到着して開放感に浸ったようである。

野田市内には、安政五年(一八五八)に奉納された二見ヶ浦の同じ図柄のものが山崎・中根・堤根の各鎮守に奉納されており、

同地域の人々がグループを組んで参詣したものと思われる。

5. 天之岩戸開扉図

古事記や日本書紀に記された有名な神話のひとつ。高天原のアマテラスが弟スサノオの乱暴を悲しみ、天岩戸に隠れてしまひ、世の中は闇に閉ざされ災いが生じてしまう。八百万の神達が集り一計を案じてアマテラスを岩戸から出す事に成功するという物語で、力持ちの神・タジカラオによつて開けられた岩戸に立つアマテラスから放たれる光、喜ぶ八百万の神々、舞を舞う天鈿女命、鶏、猿田彦命などが描かれたもので、まさしく伊勢信仰の象徴的な図柄である。

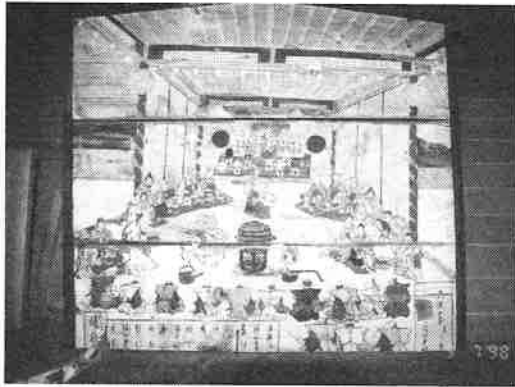
6. 武者絵馬

伊勢参り関連の絵馬には武者絵を用いる例は多くなく、牛若丸や日吉丸の絵柄のものが五枚ほど見られる。

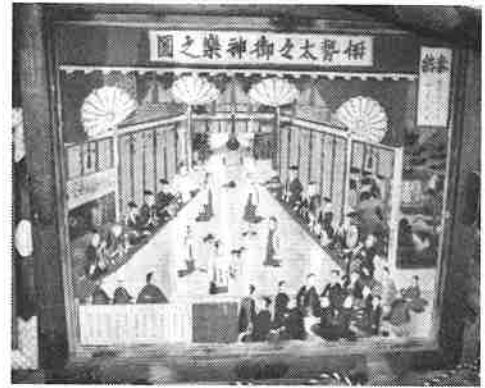
7. 神功皇后と武内宿禰図

神功皇后も武内宿禰も諸説ある人物であるが、絵馬に描かれている図柄は鎧姿の神功皇后や武内宿禰が三韓征伐に臨む図と、同じバージョンで武内宿禰が赤子を抱く(応神天皇)図の二種類がある。これは病の夫君に代わり、臨月の皇后が戦に臨み、勝利の後に赤子を産んだという逸話によるもので、伊勢参りと云うより安産・子育て祈願の信仰が絡む場合が多い。六枚の絵馬中、伊勢講による奉納は一枚である。

伊勢講絵馬・額



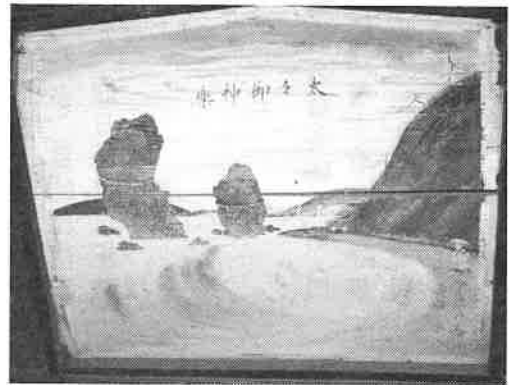
江戸期の太々神楽図



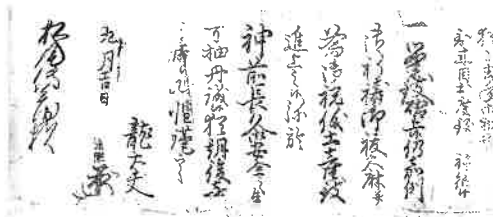
明治期の太々神楽図



天ノ岩戸図



二見ヶ浦図



御師から氏子にあてた手紙



伊勢太々神樂文字額



神功皇后と武内宿禰図



大麻箱

伊勢講碑



両神宮碑



寄附金碑



句碑



天照皇大神碑



敷石供養碑



伊勢太々記念碑



奉奏記念・狢狐



伊勢太々燈籠

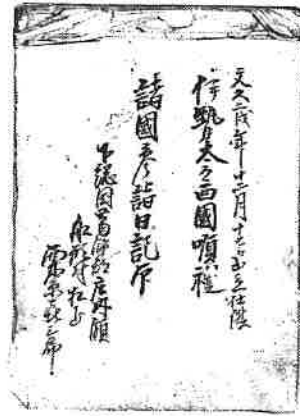
8. 写真・印刷物・御祓大麻箱

大正期から集合写真の奉納や伊勢神宮全景を図案化した印刷物が額に入れられ奉納されている例がある。

又、伊勢神宮より授かった御札は一万度御祓などと書かれ、拝殿の上部に掛けて置かれることが数例あった。前出の木間ケ瀬村の伊勢参詣入用帳には御師から「一万度御祓箱三ツ」分として銭二貫四百文を支払っている。

三 文書にみる野田市の伊勢参り

1. 船形村・伊勢参詣旅日記



市内の旧家に「伊勢太々西國順禮・諸國参詣日記印」と表題のある旅日記が残されている。これは、文久二年（一八六二）に船形村松山の栗原喜三郎が記したもので、十二月十七日に当地を出立し、伊勢神宮で太々御神楽を奉納した後、西国順礼を果たし四月二十七日に帰郷するという長旅の記録である。途中、一行の一人が琵琶湖畔の町・今瀬宿で急死するというハプニングも含まれたものであるが、ここでは伊勢までの旅の様子を見てみる事としたい。

尚、文久二年の四月には隣の目吹村二十二人も伊勢参りに出

立しており、目吹・熊野神社には御師の手代の迎えにより一同が駕籠に乗って宿を出立する様子が描かれた大絵馬が奉納されている。船形村の栗原喜三郎一行はこのグループとは別に、年末の十二月十七日に二十六名で出立している。

まず船形村の鎮守である香取神社に勢揃いし、清めの御神酒をいただき、時銭の後に一同手打のうえ、午後二時頃出立している。隣村の蕃昌を経て、岩名河岸に到着。再度、御神酒と時銭をして対岸に渡り、船形村の各家から一人ずつ見送りに来た人達とも別れ、松伏村を経て越谷宿に一日目の宿をとっている。以下、伊勢で太々神楽を奉納した後、四手に分かれて思い思いの帰路を辿る迄を日記に沿って一覧表にしてみた。

道すがら、多くの寺社などを参詣・観光しながら伊勢まで三週間の日程で到着している。翌年の文久三年正月七日に松坂宿へと入り、この頃から内宮指定の宿には太々神楽を奉納する澤潟太夫家の手代のものが酒肴を持参するなどの手厚い接待が始まる。九日に太々神楽を奉納して三日ほど周辺の社寺を参詣・観光の後に帰路につくが、喜三郎外十二人は西国順礼の予定で、ほかに三グループに分かれて思い思いのコースで帰ったようである。

2. 木間ケ瀬村・太々神楽執行入用帳

先の栗原喜三郎の旅日記では太々神楽奉納部分は単に「御神楽興行」としか記されておらず、これは別に村の講中向けの会計報告として詳細な書付を作成している可能性が強い。その太々神楽執行に関する報告書「伊勢内宮・太々御神楽執行入用帳」が船形村の北部に隣接する木間ケ瀬村の名主家に残されている。

これは文政十一年（一八二八）の正月に、木間ケ瀬村五十四人で伊勢に出かけた折のもので、その時の奉納額が松ノ木天満宮（下組）と飯塚の白山神社（上組）に掲げられている。

翌十二年は伊勢神宮外宮の式年遷宮にあたり、十三年にはいわゆるお陰参りで盛り上がるのであるが、木間ヶ瀬村の面々はその前年に参詣したようである。

記録は縦九cm×横二二cmの小さなメモ帳だが、その金額の大きさには驚かされる。代参ではないので旅費は各自が負担したとみられ、記録は伊勢の手前である松坂宿の内宮指定の宿である大和屋与兵衛でのお茶代の支払いから始まり、御師・澤潟太夫邸で太々神楽を奉奏した前後の経費の記載である。

太々神楽料を一人一両として五十三両を支払い、神楽執行中の蒔銭や供物などに一兩二分と銭一貫五百八十四文を使っている。その後、御師・澤潟太夫家の家族（太夫・太夫内室・若太夫・若太夫内室）、神楽役人や踊子など関係者全員に満遍なく心付を渡すと云う大盤振舞いをし、結局、木間ヶ瀬村の村人達五十三人が伊勢で支払った合計金額は金六十四兩三分二文と銭三百四十八文で、差引き残高が金八兩と銭三百三十三文になっている。伊勢での太々神楽奉納や観光用に七十兩余りのお金を用意して参ったことになり、当時のこの村の経済力に驚かされる。

3. 昭和の伊勢参り

昭和六年（一九三一）二月十日の東京朝日新聞に、神戸港外において九日・午後七時四〇分、尼崎汽船船籍の菊水丸三三七トンとフランス郵船ポルトス号とが、雪による見通し悪化のため、衝突したことを報道している。菊水丸は大破のうえ沈没し、海に投げ出された百一名の遭難者のうち二十八名が死亡したとある。又、翌日の同新聞房総版には、川間村の伊勢講九名がこの事故に遭遇し、うち三名の死を伝えている。

「村の有志で六ヶ年間毎年十五圓位づつ掛け金して伊勢講を組織し今回も講中として三十一人で出かけたもので」と記事にあり、九人は伊勢神宮参詣の後、皆と別れ、大阪から高松・

金毘羅・岡山を観光中にこの事故に遭遇した。いずれも三、四十代の働き盛りの男性達であった。

同じ昭和六年二月・三月に野田市域の村々から伊勢神宮に向かった講中は七地区である。大正末期から太平洋戦争に向かつて参宮が急速に増加した時代であり、この年の九月には満州事変の切っ掛けとなる柳条湖事件が起きている。

明治以前の農耕神として五穀豊穡を祈願する平和な伊勢神宮が、国家主義の象徴とされた悲しい時代であった。



おわりに

石造物調査から野田市周辺の近世・近代の庶民信仰を探るといふ作業を行っている筆者にとって、石塔として「神明宮」の

造立が極めて少ない当地の伊勢信仰は非常に解りづらいものであり、関心も薄かったといつて良い。

ところが視点を變えて各神社の境内や拝殿内に多くの伊勢参りの痕跡が残されていることに気付いたことから、当地方の伊勢信仰の深さを知ることとなった。

最近の伊勢への行程は容易となり、旅費も積み立てて行くほどのこともなく、「一生に一度は伊勢参り」という気持ちの人々の意識から消えてしまったのだろうか。近年、当地方での伊勢講結成の話が聞かれない。又、平成の伊勢講碑は平成五年に谷津香取神社境内に建てられた「伊勢神宮式年遷宮・お白石奉獻記念碑」のみのものである。

この稿を書くに当たって資料提供していただいた豊倉洋子氏、奈幡栄一氏、瀬能建夫氏、野田地方史懇話会古文書サークルの皆様は紙面を借りてお礼申し上げます。

【参考資料】

- 宮本常一編著『旅の民俗と歴史6 伊勢参宮』八坂書房
金森敦子著『伊勢詣と江戸の旅』文春新書 二〇〇八
香森與著「伊勢信仰の変遷と講と代参」『茨城の民俗』
矢野憲一著『伊勢神宮』角川選書 二〇〇六・一一
図録「伊勢の町と御師」伊勢市立郷土資料館 平成十四年

(いしだ・としこ 当館展示協力員)

文久二戊年 伊勢太々西国 礼諸国参詣日記 船形村・栗原喜三郎書

| 月 日 | 宿 泊 地 | 参詣した寺社名 | そ の 他 |
|----------|-------|----------|----------------------------------|
| 戊十二月十七日 | 船形村出立 | 鎮守・香取山集合 | 御神酒・蒔銭・手打ち 蕃昌名主・大澤専之進(同行者)へ寄る |
| | 岩名村 | | 岩名河岸 御神酒・蒔銭 |
| | 魚沼村 | | 渡場越 手打ちの上、見送り人と別れる |
| | 筑比地村 | | |
| | 大川戸村 | | |
| | 松伏村 | | |
| | 越谷宿 | | 河内屋清吉 泊り 旅籠代三四八文 |
| 戊十二月十八日 | 草加宿 | | 千住まで駕籠代老分一朱外 |
| | 千住宿 | | □ぐ□屋伊蔵 昼食代一〇〇文 |
| 戊十二月十九日 | 江戸馬喰丁 | | 紀伊国屋栄次郎 泊り 旅籠代三八八文 |
| | 日本橋 | | |
| | 品川宿 | | 渡船代一〇文 |
| | はねだ渡船 | | 飛田屋 昼食・酒代 二二一文 |
| | | 川崎大師前 | 駕籠代四朱二〇〇文外二〇〇文チップ |
| | 川崎宿 | 川崎大師様参詣 | 大米屋佐七 泊り 旅籠代四〇〇文 |
| 戊十二月二十日 | 神奈川宿 | | |
| 戊十二月二十一日 | 程ヶ谷宿 | | 戸塚↓藤沢 馬代二〇〇文 |
| | 戸塚宿 | | 小栗判官墓所 昼食代 八〇文 |
| | 藤沢宿 | 遊行寺参詣 | 藤沢↓平塚 駕籠代三朱二〇〇文 |
| | 平塚宿 | | 笹屋伊兵衛 泊り 旅籠代三四八文 |
| 戊十二月二十二日 | 大磯宿 | 虎子石開帳 | 水嶋屋幸三郎 昼食・酒代 一三七文 |
| | 小田原宿 | | 小田原↓湯元 駕籠代二朱一〇〇文 |
| | 湯元 | | 福住屋九蔵 泊り/有名宿 旅籠代一朱 |
| 戊十二月二十三日 | 畑 | | 升屋平七 昼喰代一四〇文 |
| | 箱根 | 東照大権現参詣 | |
| | 関所 | | 大和屋善蔵 泊り 旅籠代三四八文 |
| | 三嶋宿 | 三嶋大明神参詣 | 水野出羽守城下 |
| 戊十二月二十四日 | 沼津宿 | | 休み |
| | 原宿 | | |

| | | | | |
|----------|-------|------------|--|---------------------|
| 戊十二月三十日 | 神澤村 | | | 休み |
| | 石打村 | | | 山形屋八左衛門 泊り 旅籠代二八〇文 |
| | 戸倉村 | | | 休み |
| | 秋葉山 | 秋葉大権現参詣 | | |
| | 秋田川渡し | | | 渡し舟一二文 |
| | 坂下村 | | | 奥州屋庄兵衛 昼喰代一二四文 |
| | 木田川渡し | | | |
| | 一之瀬村 | | | |
| 戊十二月二十九日 | 四十八瀬 | 板橋、かち渡し | | |
| | 三倉村 | | | |
| | 森町 | | | 藤屋林蔵泊り 旅籠代二七二文 名物鶯餅 |
| 戊十二月二十八日 | 八瀬川渡し | | | 舟錢四文 橋錢八文 |
| | 掛川宿 | | | 大黒屋源五郎 昼喰代一四六文 |
| | 日坂宿 | | | 石原屋孫次郎 泊り 旅籠代三五〇文 |
| | 小峠 | | | 日坂之名物 蕨餅 一ぜん一六文 |
| | 金谷宿 | | | 小夜之中山名物 飴餅老つ五文 |
| | 大井川渡し | | | 昼喰代六八文 |
| | 嶋田宿 | | | 天上持式人掛り三二七文 酒代一〇〇文 |
| 戊十二月二十七日 | 瀬戸川渡し | | | 越前屋治郎兵衛 泊り 旅籠代三五〇文 |
| | 藤枝宿 | | | 舟錢一二文 酒八文(チツプ?) |
| | 岡部宿 | | | |
| | 鞠宿 | | | 休み とろろ汁名物 |
| 戊十二月二十六日 | 安倍川渡し | | | 田中屋源右衛門 泊り 旅籠代三五〇文 |
| | 府中宿 | | | 天上持 舟錢とも九三文 |
| | 峠 | 浅間宮外参詣 | | |
| | 久能山 | 久能山東照大権現参詣 | | 福嶋屋松次郎 昼喰代一三二文 |
| | 三保の松原 | 三保大明神参詣 | | 興津↓三保の松原 舟代一二七文 |
| | 興津宿 | 清見寺参詣 | | |
| 戊十二月二十五日 | 由井宿 | □□□川橋二ヶ所 | | 木瓜屋唯吉 泊り 旅籠代三四八文 |
| | 蒲原宿 | | | |
| | 新坂峠 | | | 上煙草名物 |
| | 岩淵町 | | | 渡船二四文 |
| | 富士川渡し | | | 白酒名物 |
| | 不二見峠 | | | □屋和兵衛 昼喰代二〇〇文/蒲焼名物 |
| | 吉原宿 | | | |
| | 柏原宿 | | | |

| | | | | | | | |
|--|--|--|--|--------|---------------|-----------|---------------------------|
| | | | | 亥正月八日 | 二見廻り 宮川町渡し | 内宮より案内二人 | 松坂屋新助・内宮定宿 酒肴御馳走 渡舟一二文 |
| | | | | | 中河原町 | | 塩合渡舟六文 |
| | | | | | 二見浦 | | 内宮定宿松坂屋新助昼喰・酒肴御馳走相成 |
| | | | | 亥正月九日 | 澤潟太夫邸 | | 澤潟太夫へ夜五ツ時到着 |
| | | | | 亥正月十日 | 朝熊岳 | 朝熊岳参詣 | 御神楽興行 |
| | | | | | | | 古市杉本屋踊見て吉 本元の萬金丹求める |
| | | | | 亥正月十一日 | | | 御山下り、茶屋にて酒肴握食御馳走に成る |
| | | | | 亥正月十二日 | 昼九ツ半時出立 | 御宮参詣・社全参詣 | 休足 |
| | | | | | 澤潟太夫邸 | | 御神楽興行の砌、蒔錢三貫七百三拾二文 |
| | | | | | 内宮定宿 | | 龍太夫様へ連中一同にて式両、茶代として |
| | | | | 亥正月十三日 | 中河原渡し場 | 方向別に分かれる | 笠屋定右衛門 泊り 御師様酒肴持参 |
| | | | | | | | 西国廻り 一二人 |
| | | | | | | | 七在所廻り 六人 |
| | | | | | | | 五在所廻り 五人 |
| | | | | | | | 信州善光寺掛け地元帰 三人 |

野田市の伊勢神宮関連石造物等一覧 (大正四年まで)

| No. | 所在地 | 奉納品 | 銘文ほか | 参詣年及び造立年 | 西暦 |
|-----|---------------|------|------------------|--------------|------|
| 1 | 船形松山 神明神社 | 笠付角塔 | 伝・神明宮 | 宝永三年十一月吉日 | 1706 |
| 2 | 谷津 神明宮 | 笠付角塔 | 大神宮 | 宝暦十年九月日 | 1760 |
| 3 | 岩名 蔵王権現堂 | 笠付角塔 | 神明宮 | 享和元年九月吉日 | 1801 |
| 4 | 野田下町 須賀神社 | 燈籠一基 | 奉獻 神明宮 永代常夜燈 | 享和二年正月吉日 | 1802 |
| 5 | 野田上町 愛宕神社 | 大燈籠 | 氏名多数/伊勢 澤瀉大夫 龍大夫 | 文政十二年四月 | 1829 |
| 6 | 五木新田 | 笠付角塔 | 神明宮 | 天保六年七月吉日 | 1835 |
| 7 | 木間ヶ瀬内野堤根 | 駒形角塔 | 大神宮 | 安政三年 | 1856 |
| 8 | 谷津 香取神社 | 手洗石 | 奉納 伊勢太々講中 | 安政五年三月吉日 | 1858 |
| 9 | 野田上町 愛宕神社 | 青銅狛犬 | 伊勢太々講 | 文久三年九月吉日 | 1863 |
| 10 | 野田上町 愛宕神社 | 青銅燈籠 | 伊勢太々講 | 文久三年九月吉祥日 | 1863 |
| 11 | 野田上町 愛宕神社 | 伊勢講碑 | 御本社敷石供養碑 二ノ上ノ壇追 | 文久三年五月吉祥日 | 1863 |
| 12 | 岩名 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢天照皇大神宮 太々御神楽 | 明治六年五月吉日 | 1873 |
| 13 | 宮崎 神明神社 | 手洗石 | 奉納 伊勢太々 | 明治十二年十月 | 1879 |
| 14 | 堤台 八幡神社 | 伊勢講碑 | 伊勢大神宮太々御神楽修行 | 明治十二年五月吉日 | 1875 |
| 15 | 岩名 香取神社 | 笠付角塔 | 天照日天社 | 明治十二年 | 1879 |
| 16 | 今上 八幡神社 | 句碑 | 伊勢太々 | 明治十五年二月 | 1882 |
| 17 | 清水 神明宮内 | 伊勢講碑 | 天照皇太神 | 明治十七年十月十六日 | 1884 |
| 18 | 谷津 香取神社 | 燈籠一對 | 伊勢太々講 | 明治二十年四月吉日 | 1887 |
| 19 | 山崎 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々御神楽 和歌刻 | 明治二十一年二月二日 | 1888 |
| 20 | 木間ヶ瀬丸山 路傍 | 巡拝塔 | 伊勢参宮親子二而十五度大願成就 | 明治二十一年二月九日 | 1888 |
| 21 | 野田上町 愛宕神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講井戸側再建寄附 | 明治二十四年五月 | 1891 |
| 22 | 堤台 八幡神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神宮 | 明治二十三年四月吉日 | 1891 |
| 23 | 岩名 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神宮 伊勢太々御神楽 | 明治二十五年二月十五日 | 1892 |
| 24 | 山崎 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納口 天照皇大神 太々御神楽 | 明治二十五年二月十九日 | 1892 |
| 25 | 谷津 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神 太々御神楽 | 明治二十五年三月吉日 | 1892 |
| 26 | 東金野井 熊野神社 | 燈籠一對 | 伊勢太々御神楽 | 明治二十六年四月 | 1893 |
| 27 | 小山 水神社 | 供養塔 | 大神宮 稻荷神社 八大竜王 | 明治二十六年六月 | 1893 |
| 28 | 関宿内町 神明神社 | 伊勢講碑 | 伊勢両大神宮参拝記念 奉納敷石 | 明治二十六年六月 | 1893 |
| 29 | 木間ヶ瀬志部前堀 駒形神社 | 燈籠一對 | 伊勢太々御神楽 | 明治二十六年十月吉日 | 1893 |
| 30 | 木間ヶ瀬砂南 稻荷神社 | 燈籠一對 | 伊勢太々 奉獻 御神燈 | 明治二十八年十月吉祥日 | 1895 |
| 31 | 木間ヶ瀬下根 香取神社 | 燈籠一對 | 伊勢太々御神楽 | 明治二十九年二月二十九日 | 1896 |
| 32 | 谷津 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神 太々御神楽 | 明治二十九年四月吉日 | 1896 |
| 33 | 堤根 菅原神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神 伊勢太々御神楽 | 明治二十九年二月吉日 | 1896 |
| 34 | 今上 女体神社 | 句碑 | 伊勢太々御神楽 | 明治三十年三月二十一日 | 1897 |
| 35 | 野田下町 須賀神社 | 社前敷石 | 奉獻 伊勢太々講 | 明治三十年七月 | 1897 |
| 36 | 上花輪 香取神社 | 狛犬一基 | 伊勢太々講 | 明治三十三年十一月三日 | 1900 |
| 37 | 野田上町 愛宕神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講中 | 明治三十五年五月吉日 | 1902 |
| 38 | 三ツ堀 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉奏伊勢太々御神楽 | 明治三十七年二月二十一日 | 1904 |
| 39 | 柏寺 香取神社 | 供養塔 | 天照大神 稻荷神社 | 明治四十年二月 | 1907 |
| 40 | 上花輪 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講連名 | 明治四十年三月 | 1907 |
| 41 | 鶴奉 稻荷神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々御神楽 | 明治四十二年二月七日 | 1909 |
| 42 | 岩名 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢、金毘羅、宮嶋参拝記念 | 明治四十三年二月十七日 | 1901 |
| 43 | 目吹高根 香取神社 | 燈籠一基 | 御神燈 伊勢講 | 明治四十三年三月十一日 | 1910 |
| 44 | 山崎 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇大神 太々御神楽奉奏 | 明治四十三年二月十七日 | 1910 |
| 45 | 中里 三社権現 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講為記念 敷石寄附 | 明治四十五年二月八日 | 1912 |
| 46 | 木間ヶ瀬志部前堀 稻荷神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々御神楽 | 明治四十五年二月十日 | 1912 |
| 47 | 瀬戸 八坂神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講記念碑 | 明治四十五年二月二十二日 | 1912 |
| 48 | 大殿井 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神 | 明治四十五年四月十五日 | 1912 |
| 49 | 東金野井 天神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々講連名 | 明治四十五年五月 | 1912 |
| 50 | 上花輪 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納 伊勢太々講 | 明治四十五年五月吉日 | 1912 |
| 51 | 野田下町 須賀神社 | 伊勢講碑 | 天照皇大神 | 明治力 | 1912 |
| 52 | 岩名 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納 太々御神楽奉奏記念 | 大正二年二月七日 | 1913 |
| 53 | 船形 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納 伊勢太々講中 | 大正二年二月八日 | 1913 |
| 54 | 谷津 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢太々記念 | 大正二年二月十三日 | 1913 |
| 55 | 今上 八幡神社 | 伊勢講碑 | 奉納伊勢太々記念 | 大正二年二月二十一日 | 1913 |
| 56 | 目吹高根 香取神社 | 伊勢講碑 | 伊勢参宮記念 | 大正二年三月十七日 | 1913 |
| 57 | 船形 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納 伊勢太々講中 | 大正二年六月 | 1913 |
| 58 | 船形 香取神社 | 伊勢講碑 | 奉納 伊勢太々 | 大正四年三月十五日 | 1915 |
| 59 | 五木 香取神社 | 伊勢講碑 | 天照皇太神宮 | 大正四年 | 1915 |

野田市の伊勢参宮奉納絵馬・額一覧 (明治二十年まで)

| No. | 所在地 | 種類 | 銘文ほか | 作者等 | 造立年 | 西暦 |
|-----|----------------|----|------------------|---------|-------------|------|
| 1 | 飯塚 白山神社 | 書額 | 一万度御祓大麻 | 御師 龍太夫 | 享和元年正月吉日 | 1801 |
| 2 | 上灰毛 稻荷神社 | 書額 | 一万度御抜大麻／伊勢講 | 御師 龍太夫 | 文化十二年 | 1815 |
| 3 | 船形 香取神社 | 絵馬 | 天岩戸図 | 鶯□□ | 文政七年□月朔日 | 1824 |
| 4 | 下三ヶ尾 香取駒形神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽 | | 文政十年正月 | 1827 |
| 5 | 鶴奉 稻荷神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 文政十年六月吉日 | 1827 |
| 6 | 松ノ木 天満宮 | 書額 | 伊勢太々御神楽額 | | 文政十一年一月吉祥日 | 1828 |
| 7 | 飯塚 白山神社 | 書額 | 伊勢大々御神楽 | | 文政十一年正月吉日 | 1828 |
| 8 | 瀬戸 八坂神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽 | 江風斎藤原□□ | 天保三年正月二十三日 | 1832 |
| 9 | 東金野井 天満宮 | 絵馬 | 日吉丸と蜂須賀小六図 | 越谷孝 堤等谷 | 天保四年晩春 | 1833 |
| 10 | 目吹中 熊野神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | 堤秋月 | 天保十年六月 | 1839 |
| 11 | 清水 八幡神社 | 絵馬 | 二見ヶ浦図 | | 弘化二年□月吉日 | 1845 |
| 12 | 山崎 香取神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 東雲 | 弘化三年六月吉辰 | 1846 |
| 13 | 山崎 香取神社 | 書額 | 天照皇太神宮太々御神楽 | | 弘化四年春 | 1847 |
| 14 | 下三ヶ尾 香取駒形神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 龍眠 | 嘉永元年二月 | 1848 |
| 15 | 瀬戸 八坂神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 東雲 | 嘉永五年正月吉辰 | 1852 |
| 16 | 西三ヶ尾 香取神社 | 書額 | 伊勢太々神楽 | | 嘉永五年二月 | 1852 |
| 17 | 松ノ木 天満宮 | 書額 | 伊勢参宮記念額 | 愛蓮篠塚剛重 | 嘉永六年正月 | 1853 |
| 18 | 下三ヶ尾 香取駒形神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | | 安政二年正月 | 1855 |
| 19 | 東金野井 天満宮 | 絵馬 | 平敦盛と熊谷直実図 | | 安政四年 | 1857 |
| 20 | 飯塚 白山神社 | 書額 | 伊勢大々御神楽大願成就 | 龍兵力 | 安政五年正月二十八日 | 1858 |
| 21 | 次木 三島神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 安政五年四月吉日 | 1858 |
| 22 | 中根 鹿島神社 | 絵馬 | 二見ヶ浦図／伊勢講 | | 安政五年七月吉日 | 1858 |
| 23 | 堤根 菅原神社 | 絵馬 | 二見ヶ浦図／伊勢講 | | 安政五年六月吉日 | 1858 |
| 24 | 山崎 香取神社 | 絵馬 | 二見ヶ浦日之出図 | 照景 | 安政五年六月吉辰 | 1858 |
| 25 | 目吹中 熊野神社 | 絵馬 | 古市出立之図 | | 文久二年四月 | 1862 |
| 26 | 目吹上 香取神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 江戸後期 | |
| 27 | 三ツ堀 香取神社 | 書額 | 大願成就／伊勢太々御神楽 | | 慶應四年正月二十七日 | 1868 |
| 28 | 船形 香取神社 | 絵馬 | 神功皇后と武内宿禰図 | 一虎齋歌川芳萬 | 明治八年一月吉辰 | 1875 |
| 29 | 山崎 香取神社 | 書額 | 伊勢御神楽 | 東雲敬明 | 明治八年二月吉辰 | 1875 |
| 30 | 谷津 香取神社 | 絵馬 | 伊勢参宮講中 | | 明治九年三月吉日 | 1876 |
| 31 | 目吹下 香取神社 | 書額 | 太々御神楽／伊勢講 | 望月敬明 | 明治十年四月吉辰 | 1877 |
| 32 | 中里 三社権現 | 絵馬 | 伊勢太々神楽奉納図 | | 明治十一年二月 | 1878 |
| 33 | 下根 香取神社 | 書額 | 伊勢大々御神楽 | | 明治十一年二月二十一日 | 1878 |
| 34 | 東金野井 天満宮 | 絵馬 | 牛若丸鞍馬山修行図 | | 明治十一年五月 | 1878 |
| 35 | 岡田 大杉香取神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 明治十一年五月 | 1878 |
| 36 | 山崎 香取神社 | 絵馬 | 二見ヶ浦日之出図 | | 明治十一年八月上旬 | 1878 |
| 37 | 岡田783-4 岩本家天満宮 | 絵馬 | 神功皇后と応神天皇を抱く武内宿禰 | | 明治十一年 | 1878 |
| 38 | 堤台 八幡神社 | 絵馬 | 伊勢神宮参詣図 | | 明治十二年 | 1879 |
| 39 | 船形 香取神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 明治十三年七月 | 1880 |
| 40 | 鶴奉 稻荷神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | 谷仙 | 明治十三年七月二十五日 | 1880 |
| 41 | 清水 八幡神社 | 絵馬 | 武者二人図 | 歌川□光 | 明治十三年八月十六日 | 1880 |
| 42 | 上灰毛 稻荷神社 | 絵馬 | 伊勢御神楽之図 | | 明治十四年 | 1881 |
| 43 | 瀬戸 八坂神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 望月東雲 | 明治十四年二月良辰 | 1881 |
| 44 | 観音堂 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | | 明治十四年三月 | 1881 |
| 45 | 次木 三島神社 | 書額 | 三嶋大神／伊勢太々御神楽 | | 明治十四年十二月 | 1881 |
| 46 | 松ノ木 天満宮 | 絵馬 | 伊勢御神楽之図 | | 明治十四年二月十九日 | 1881 |
| 47 | 飯塚 白山神社 | 絵馬 | 伊勢神宮図 | | 明治十四年四月吉日 | 1881 |
| 48 | 古布内山 八幡神社 | 絵馬 | 伊勢御神楽之図 | | 明治十四年二月十九日 | 1881 |
| 49 | 目吹上 香取神社 | 書額 | 太々御神楽／天照皇太神宮 | 東雲 | 明治十五年三月吉辰 | 1882 |
| 50 | 本堂 | 絵馬 | 宇治川先陣争図 | | 明治十五年十一月三日 | 1882 |
| 51 | 柳沢 稻荷神社 | 絵馬 | 伊勢御神楽之図 | 一虎齋芳萬 | 明治十五年二月二十六日 | 1882 |
| 52 | 鶴奉 神明神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽之図 | 一虎齋芳萬 | 明治十五年二月二十六日 | 1882 |
| 53 | 鶴奉 稻荷神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 望月東雲 | 明治十五年二月二十六日 | 1882 |
| 54 | 柳沢 稻荷神社 | 絵馬 | 伊勢御神楽之図 | 一虎齋芳萬 | 明治十五年二月二十六日 | 1882 |
| 55 | 小作 稻荷神社 | 絵馬 | 神楽舞図／天之岩戸 | | 明治十五年一月吉日 | 1882 |
| 56 | 砂南 稻荷神社 | 絵馬 | 神楽舞図／天之岩戸 | | 明治十五年一月吉日 | 1882 |
| 57 | 山崎 香取神社 | 書額 | 伊勢太々御神楽 | 東雲敬明 | 明治十七年二月二十一日 | 1884 |
| 58 | 山崎 香取神社 | 書額 | 伊勢神宮拝賽 | 東雲 | 明治二十年二月二十一日 | 1887 |
| 59 | 岡田 大杉香取神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 明治二十年二月十六日 | 1887 |
| 60 | 岡田 大杉香取神社 | 絵馬 | 伊勢二見ヶ浦図 | | 明治二十年二月十六日 | 1887 |
| 61 | 岡田 八幡神社 | 絵馬 | 伊勢太々御神楽図 | | 明治二十年二月十六日 | 1887 |